

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520230

研究課題名(和文) コックニー詩派における「南」の思想とリベラリズム

研究課題名(英文) “The South” and Liberalism in the Cockney School

研究代表者

後藤 美映 (GOTOH MIE)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20243850

研究成果の概要(和文)：本研究はコックニー詩派と称されたリイ・ハント、バイロン、シェリー、キーツらのロマン派第二世代の詩人たちが、イギリスの美学的政治的改革を企図するために、ヨーロッパの「南」の思想を体現するイタリアを詩的源泉としたことの意義を明らかにした。特にハントらによってピサで創刊された『自由主義者』や、ハントらが近代文学の父として範としたダンテを、彼らの思想の軸として、彼らが説いた自由主義思想について考察した。

研究成果の概要(英文)：The second-generation Romanticism which was loosely organized around the Cockney School of Leigh Hunt, George Gordon Byron, Percy Bysshe Shelley and John Keats claimed the cultural and political reform of English society by manifesting liberal knowledge embedded in Italy. This project gave a main role to their experiment in *The Liberal* and adaptation of Dante's poetry as a major determinant of their reformist tendencies and examined their shared idea of liberalism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：英文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学、ロマン主義、美学

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

コックニー詩派とは、リイ・ハント、シェリー、バイロン、ハズリット、キーツ、ベンジャミン・ヘイドンらを一つの文人集団として捉え揶揄するために保守派の批評家たちが与えた名称であることから窺えるように、ロマン主義文学を考察するにあたっては、当時の政治的党派性を考慮に入れる必要がある。さらに、自然を背景に憂鬱と孤立と内省を歌うとされた従来のロマン主義文学は、コックニー詩派が象徴する、同盟意識とブル

ジョワジー的快樂に基づいた集団性と革新性という観点から捉え直すことができる。したがって本研究は、コックニー詩派が唱えたイギリスの改革は、こうした政治的党派性や美学的改革の理念を背景に問い直すことができるという着想にいたった。

(2) 研究の動機

本研究の着想にいたるまではキーツの詩を中心に考察し、唯美主義的な評価によって「美の詩人」として捉えられてきたキーツの詩において、過剰ともいえる美学的スタイル

こそ、当時の美学的規範を逸脱する革新的な詩的試みを内包しているのではないかということ明らかにしてきた。本研究では、こうしたキーツの詩的試みを、さらにコックニー詩派という集団性において捉え直し、キーツを含むロマン主義第二世代の文学が、イタリアという「南」の地においてどのような政治的美学的改革を唱えたかについて発展させることを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、コックニー詩派がアルプスを挟んだ南北ヨーロッパのうち、地理的「南」を舞台として、イギリスにおける美学的政治的改革を主題にした詩を歌ったことの意義について考察することを目的とする。当時、南北という地理的方位においては、古代世界を象徴した「南」に対し、「北」の近代性の優位が唱えられていた。古典主義芸術への懐古趣味とも取られかねない、歴史的に逆行した方位としての「南」が、19世紀ロマン主義文学において自由主義思想と結びつき、近代的改革思想の萌芽を宿していたことは注目に値する。

特にバイロン、シェリー、ハントのピサ・サークルがどのような文化的、政治的な理想モデルを「南」に求めたかについて具体的に考察し、イタリアとイギリスという地理的三重性をもった世界観が、いかにコスモポリタンの視点を生み出していたかについて明らかにする。

また、本研究における特色は、南北という地政学をロマン主義文学において考察することであり、サイードの『オリエンタリズム』により焦点が当てられた東西という軸をさらに敷衍し、東西に重ね合わされる南北の軸を考察することである。従来の研究においては、「東洋」と「西洋」の表象については多くのことが論じられてきたが、ヨーロッパ内部における境界としての南北の研究はまだ少ない状況にある。したがって、イタリアを中心とする「南」が、ヨーロッパ内部における他者として、イギリスが自己定位を行う場としての鍵となった一方で、ロマン主義第二世代の文学において、改革思想の磁場として機能したことを論じる。

3. 研究の方法

(1) 平成20年度～平成21年度

研究目的にしたがって、イギリスのコックニー詩派について、国内外における広範な資料収集を行った。特に、今回の研究においては、北方、南方についての表象やイメージを具体的に呈示する資料や、イタリアを題材としたハントらの韻文、散文、翻訳、批評についての資料を収集した。また、同時代に形成されたリバプールやコペにおける文人サロ

ン、ドイツロマン主義といった、ヨーロッパ間のロマン主義の相違を浮き彫りにする資料の収集も行った。さらに、文学、歴史、文化、政治、経済の密接な関連性を視野におきながら、ロマン主義を特徴づける時代性を読み解くための資料を収集した。その際、文学のテキストのみならず、当時の雑誌、批評誌、経済、政治分野の第一次資料、図版や絵画といった視覚的資料等までを含めた、学際的な視点を取り込んだ資料の収集を目指した。また、文学テキストにおいては、第一次資料の精読を中心とするため、できるかぎり多くの文学テキストの第一次資料を入手した。さらに批評書を中心とした第二次資料の収集も行い、最新の批評動向への目配りも行った。こうした資料に基づいて、研究の具体的な論点を打ち出し、研究論文のドラフトを作成した。

(2) 平成22年度

研究計画の最終年度にあたる本年度は、学会での口頭発表や論文の公開によって成果を発表した。具体的には、5月にこれまでに研究した内容をまとめた論文を国内の学会誌（徳淵論文、査読有）に提出した。さらに10月に国内の学会のシンポジアストとして、5月に発表した論文を別の観点から発展させた論文を発表した。この口頭発表は、翌年1月に国内の学会の記念論文集（査読有）に論文として寄稿した。

さらにこうした研究内容を発展させ、平成23年7月に開催されるロマン派の国際学会（査読有）にて口頭発表をする予定である。

4. 研究成果

本研究において、コックニー詩派の詩作にみられる、イタリアという文化的、地政学的空間性に付与されたリベラリズムの思想について結論を得るに至った。具体的には、1822年にハント、バイロンらが創刊した*The Liberal*において企図された、コスモポリタンのリベラリズムの意義と、彼らがイギリスにおける美学的趣味を改革するための布石としたダンテの詩の意義という2つの観点から研究成果を得た。

(1) イタリアのピサにおいてハントらによって創刊された*The Liberal*の理念は、南の地、イタリアから自由主義的知識をイギリスに向けて発信し、イタリアの文学的豊穡さをイギリスへと移植することによって、新しい美的規範を立ち上げ、イギリスの現体制をより理想的な体制へと改革していくことであった。

当時イギリスは、フランス革命、ナポレオン戦争の脅威を身近に経て、政治的な保守反動の動きが強まり、保守派評論誌が反体制の

動きを封じ込めるべく、敬虔さと節度に基づく思想を流布する思想形成の役目を担っていた。したがって、こうした当時の政治的状況を概観すれば、liberalという雑誌名は、大きな社会の変動のただ中で旧体制側と自由主義側とによって戦われる、いわば文化的かつ政治的な戦いを喚起する名であったと考えられる。すなわち、ハントらの目指した改革は、知の普及という文化的形態を取るが、それは多分に政治的な意味合いを含んでいたといえる。そしてコスモポリタンのハントらの主張は、イギリスの宗教的政治的自由は自国の伝統によって培われ国外から移植されるべきものではないという保守派の愛国主義的主張とは対立し、反イギリス的、非伝統的思想として捉えられた。

例えば、保守派が土台としたイギリスらしさは、チャーサー、スペンサー、ミルトンという正典によって形成され、*The Liberal*において掲げられる、ダンテ、タッソ、シェイクスピア、スペンサーといった文学的系譜は、イタリアとイギリスの文化的融合でありイギリスらしさを涵養する土壌にとって脅威となった。

*The Liberal*の創刊と、イギリスという国家のアイデンティティを形成していく時期とが重なった時、コスモポリタンの視座においてイタリアの文学性を称揚することは、それ自体政治的に反イギリス的行為であった。しかし敢えてハントらは、旧体制と専制政治を、人々を支配するための外部の法とみなし、人々の自律性という内的な法によって形成される共和主義的な社会の実現に向けた改革を主張した。人々の内部の法として機能する美学的規範としての新しい趣味は、かつて市民の自律性によって共和主義的理想が実現し、ヨーロッパの専制政治への抵抗と解放を謳うイタリアにおいてこそ呈示され、南の地イタリアがリベラリズムの磁場となり得たという結論を得た。

(2) イタリア文学を代表し、近代ヨーロッパ文学の父として、ハントらが範とした詩人がダンテであった。特にダンテの『神曲』は18世紀後半から19世紀の初頭にかけてさまざまな形で英訳され、1814年にヘンリー・フランシス・ケアリーによってその完訳をみた。ロマン主義時代におけるこうしたダンテの流行は、美学的趣味に大きな変革が起こったことを示している。ダンテ評価にみられるロマン主義時代の趣味の変革は、構造的統一や様式的調和よりも情感や熱情を重視する文学的様式への移行の中に見られるといえ、情感と

表現力に優れたダンテの再評価であったともいえる。しかし、特筆すべきは、ハントらが『神曲』の翻訳、もしくは改作によって目指したことは、イギリス詩の改革であったことである。彼らの目指した詩の改革は、ダンテの詩を通して時代の精神性を象徴する近代的な詩を生み出すことであり、ひいてはイギリスという国の美学的趣味を新しいものへと変革していくことであった。

例えば、ダンテの『神曲』を改作したハントの『リミニ物語』の大きな意義は、人間によって犯された罪の数々を目の当たりにしていくというダンテの巡礼の旅が意味する道徳的宗教的判断を宙づりにし、愛の物語の鮮烈さを再現し、人間の情感や共感を高らかに歌い上げることであった。さらにまた、道徳的規範を不安定にする新しい価値観として、ハントが詩のスタイルに持ち込んだのは、日常性と口語体であり、それによってハントはブルジョアジー的快楽を称揚し、近代的詩を創出しようとしたといえる。

キーツもまたダンテという文学的オーソリティを用いて、ソネットによる恋愛詩を創作しながら、詩作のあり方を自覚的に自己言及するという近代的な詩のあり方を呈示した。

『神曲』の地獄篇第5歌のパオロとフランチェスカの愛のエピソードを改作したキーツの詩と『神曲』との共通点は、詩人の自己という確固たる視点によって物語が構成されている点である。ダンテは、地獄篇を倫理的判断という規範によって統御するというよりも、昏倒してしまうほどの憐憫の情を抱いたり、包み隠さず恐怖心を露にしたりするという自然な人間の感情の発露によって、巡礼の旅を構成しているのであり、詩人の自己を中心に据えた物語が展開されるといえる。すなわち『神曲』は、宗教という絶対的な倫理的規範にそった物語としての体裁を取りながら、ダンテという詩人の自己の意志と感情が強く表現されているということにおいて傑出しており、キーツのソネットも同様に、詩人の自己言及によって歌われているといえる。キーツのソネットにおける美学的スタイルは、キリスト教的倫理と形式を重んじたロマン派以前の時代におけるスタイルを逸脱し、自己の内奥を語るドラマを打ち出した美学的改革といえるのである。ダンテを援用した愛の歌と詩的実験によって、キーツの詩がいかにか近代的な詩を生み出そうという意識によってつくりあげられていたかを指摘することができる。

しかしさらに注目すべき点は、ダンテが過去の偉大な詩人であるのみならず、故郷のフレンチェを追われ亡命生活を送った政治家で

あり、祖国のために戦ったエグザエルの詩人であったということがロマン派の詩人たちを捉えたことである。19世紀初頭において他国の支配からのイタリアの独立運動が高まり、ヨーロッパにおいてイタリアという国が専制政治への抵抗と独立を象徴する国となり、自由主義思想を信奉したイギリスの詩人たちの目指した国となった際、ダンテもまたその象徴となった。

さらに、ロマン主義時代におけるダンテ流行の背景には、ダンテがフランスの文学の伝統とは異なる、想像力と情感溢れる詩風を代表する詩人であり、イギリス文学をさらに豊かにするために趣味の変革と、イギリス文学遺産とイタリア文学との融和をもたらすという考え方があった。したがって、ハントらがダンテの詩を称揚した背景には、ダンテの詩を通して、時代の精神性を象徴する近代的な詩を生み出し、ひいてはイギリスの美学的趣味を新しいものへと改革していくという自由主義的改革の思想が存在していたと考えられる。

しかし、流行するダンテ翻訳の背後には、イギリスらしさを説くナショナリズムと自由主義的コスモポリタニズムとの対立があったと考えられ、ダンテをめぐる文化的、政治的戦いには、イギリスかイタリアかというその出自を問題として、正統性と反イギリス性という対立が生じた。こうした文化的、社会的状況を鑑みたとき、ハント、キーツにおける恋愛詩は、ダンテという文学的遺産である南の地の愛を歌いながら、宗教的、伝統的規範を逸脱する自己を謳歌し、イギリスの美学的政治的な改革を唱える歌であったという結論を得るにいたった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 後藤美映、南の地からの改革の詩——*The Liberal* における美学的教育と自由主義、英文学研究支部統合号、査読有、3巻、2011、489-500
- ② 後藤美映、Erasmus Darwin と John Keats の詩における神経・刺激・感覚——*Hyperion* における視覚性とラディカリズム、福岡教育大学紀要、査読無、59巻、2010、39-47
- ③ 後藤美映、Citizens of the World—Romantic Cosmopolitanism、英語青年、査読無、154巻7号、2008、43

[学会発表] (計3件)

- ① 後藤美映、'When sages looked to Egypt for their lore': Egyptian Art and the Threat of Visuality in Keats's *Hyperion*、International Conference of Coleridge, Romanticism and the Orient、2011年7月17日、神戸国際会議場
- ② 後藤美映、南の地からの愛の歌——イギリス・ロマン派の恋愛詩における love の多義性とイタリア、日本英文学会九州支部、2010年10月30日、九州大学

[図書] (計1件)

- ① 後藤美映、音羽書房鶴見書店、『イギリス・ロマンティシズムの光と影』、2011年、75-94

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 美映 (GOTOH MIE)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20243850